

トリコロールに燃えて (HEAD IN THE CLOUDS)

2004(平成16)年11月1日鑑賞(OS劇場)

★★★★



監督・脚本＝ジョン・ダイガン／出演＝シャーリーズ・セロン／ベネロペ・クルス／スチュアート・タウンゼント／トーマス・クレッチマン／デヴィッド・ラ・ハイエ／レイチェル・ルフブエ（ギャガ・ヒューマックス共同配給／2004年アメリカ映画／121分）

……あの『モンスター』でアカデミー最優秀主演女優賞を獲得したシャーリーズ・セロンが、本来の美しさを存分に見せつけた感動作！ 華やかなパリでの享楽的な生活 VS. スペイン内戦への参加、ナチス占領下のパリでのレジスタンス活動という対比の中で、貫き通した男女の愛が感動的に描かれるもの。しかし、日本人には少し難しすぎるかも……？ ちなみにトリコロールとは……？

トリコロールとフランス革命

1789年のフランス革命は近代世界史において最も重要な出来事のひとつ。

フランス革命は、宝塚歌劇の『ベルばら』で一躍若者たちにも有名になった(?)が、劇団四季のミュージカル『レ・ミゼラブル』もその舞台となったのはフランス革命の時代。そしてまた、ナポレオンの物語においてもフランス革命は重要な時代背景。

封建社会から近代社会への転換を象徴するスローガンとなったのは、自由・平等・博愛という3つの言葉。そして、この3つのキーワードを象徴するフランス国旗が三色旗であり、これをフランス語で「トリコロール」というわけだ。Triは「三」、^コロールは「色」という意味だから、文字どおり「三色旗」のこと。

さて、この程度の知識について、読者の皆さんはどのくらいの人たちが持っているのだろうか……？ 恥ずかしながら私は「トリ」がそういうフランス語だとは今まで知らなかったが……？

スペイン内戦と『誰が為に鐘は鳴る』

この映画は、前半と後半でガラリと雰囲気が変わる。前半は1930年代の華やかなパリが舞台で、3人の主人公たちは、多少享楽のすぎるきらいはあるものの理想的な生活を展開し、すべての幸せを享受していた。

しかしその時代はナチス台頭の直前であったため、その幸せは長くは続かなかった。

1939年9月1日のナチス・ドイツによるポーランドへの侵攻開始以降、ヨーロッパはナチスとの長い長い戦いに入ることになったが、その「前哨戦」となったのがスペイン内戦。これは、イタリアとドイツの支援を受けたフランコ将軍率いる反乱軍と共和党政府との内戦だが、そこにはヨーロッパ各地から多くの義勇兵が参加した。

そんなスペイン内戦は、1936年から1939年まで続いたが、その戦いに義勇兵としてアメリカから参加したロバート・ジョーダンと地元ゲリラ軍に救われこれと行動をともにしていた美しい娘マリアとの愛を感動的に描いたのが、ヘミングウェイの小説『誰がために鐘は鳴る』。

そしてこれをゲイリー・クーバーとイングリッド・バーグマン主演で映画化したのが、1943年の感動作『誰が為に鐘は鳴る』。この映画の理解のためには、このスペイン内戦のお勉強が不可欠だ。

とびきりの美女の再登場！

シャーリーズ・セロンは、13キロ以上も体重を増やして挑んだ問題作『モンスター』において、見事、2004年アカデミー賞最優秀主演女優賞を獲得した。しかし本作品では、女ってこれほど化けるのか、と驚嘆させられるほど、たちまち元のとびきりの美女に逆戻り！ もちろん本人だって、『モンスター』のままの姿ではイヤなことは当然！

そんなシャーリーズ・セロンが、この映画では何とも情熱的で不思議な魅力いっぱい的女主人公ギルダの役を演じ、美しい衣装を取っかえ引っかえして登場するほか、男も取っかえ引っかえ(?)しながら、美しいヌードシーンやベッドシ

ーンも披露。こりゃ絶対観なければ……。

もう1人はスペイン美女

1930年代のパリを舞台にアーティストとして華やかな活動を展開していたギルダの助手兼モデル兼友人（愛人？）となるのが、スペイン人女性のミア。そしてこのミアを演ずるのが、スペイン人女優のペネロペ・クルス。『コレリ大尉のマンドリン』（01年）や『バニラ・スカイ』（01年）に登場した、ジュリア・ロバーツにちょっと似た感じの目や口の大きい、いかにもスペイン風の美女。このミアが、パリでのリッチで享樂的かつ十分満足できる3人の共同生活を捨ててまでスペイン内戦に参加したのは、やはり断ち切ることでできない祖国や家族への愛だ。

そんなミアは、前半では妖しげなセミヌード姿を披露しながら乱れた（？）生活を続けていたが、後半では一転して、困難なスペイン内戦の中で働く献身的な看護士というシリアスな役を見事に演じている。

さらにミアは、ガイとギルダの間に入り、微妙な3人の間の人間関係を保つという、きわめて難しい役割。そんな不思議な役柄をペネロペ・クリスが自然にこなしているのは立派なもの。

イングランド紳士は私生活でも……？

前半では、大学1年生の初心な姿から享樂的な3人の共同生活を送る毎日まで、そして後半では、うって変わってスペイン内戦での義勇兵からナチス占領下のパリでのレジスタンスの闘士まで、これもペネロペ・クリス同様に幅広くガイの姿を演じ分けているのは、1972年アイルランドのダブリン生まれのスチュアート・タウンゼント。

背が低い（？）のが少し難点だが、ハンサムでイングランド紳士そのものという雰囲気は超一流。

こんなスチュアート・タウンゼントは、『コール』（02年）でのシャーリーズ・セロンとの競演をきっかけにプライベートでも……。やはり美男美女は自然に結びつく運命なのかな……？

敗戦国における女の生きざま……？

戦争は訴訟と同じで、途中で和睦（和解）が成立しない限り、必ず勝者と敗者が生まれることになる。これは洋の東西を問わず、また古代、中世、近代を問わず同じ。そして昔は、敗けた国の男は皆殺しにされたり、女はみんな奴隷にされたりしたもの。

劇団四季のミュージカル『アイダ』は、古代エジプトのファラオ（王）の時代、敵国ヌビアに侵攻してこれを征服した若き將軍ラダメスが捕虜として連れ帰ったアイダを主人公とするものであり、このアイダが身分を隠したヌビアの王女だったというお話。

近代戦争では、敗戦国の女たちがみんな捕虜にされることはないものの、そりゃみんな大変な立場におかれ、悲惨なもの。ちなみに、第一次世界大戦でこっぴどい敗戦を被ったドイツが戦勝国に支払うべき莫大な賠償金に苦しむ中で、ヒトラーの国家社会主義（ナチズム）が台頭してきたのは有名なお話。

それはともかく、今まで戦争に敗けたことのなかった神国ニッポンが太平洋戦争で敗けた後、占領軍として入ってきたアメリカ兵と日本女性がどのように向かい合ったか？ それは、たとえば田村泰次郎原作の小説『肉体の門』やこれを映画化した『肉体の門』（48年・吉本興業・大泉）、（64年・日活）、（77年・日活）、（88年・東映）を観れば明らかだろう。

ドイツや日本と同じく、第二次世界大戦で敗戦国となったイタリアでのそんな女性の姿を描いた魅力的な作品が、『マレーナ』（00年）。イタリアに侵攻してきたドイツ軍将校とねんごろになって贅沢三昧にふけるモニカ・ベルッチ扮するマレーナを、同僚の女たちがみんな蔑視、敵視したのは当然。そのうらみ、つらみは、ドイツ軍が敗退しイタリアから逃げ帰る状況になれば……。

それと同じことが、この映画ではパリにおいて、あ的美貌のシャーリーズ・セロンの身の上にも……。

ギルダの真の姿は……？

この映画は、男1人（ガイ）と女2人（ギルダとミア）のトライアングルを軸

に描かれたものだが、主人公はあくまでギルダで、そりゃ魅力的な女性。映画の冒頭、占い師に手相を見てもらう14歳のギルダの姿が登場するが、占い師の見立ては、「あなたの34歳以降の人生が見えない」という不吉なもの。このことがギルダの生き方にどのような影響を及ぼしたのかは知らないが、とにかくギルダの生き方は奔放そのもの。

魅力的で前衛的といえそうだが、ふしだらで欲望の赴くままといえ、そうになってしまうもの。

嵐の夜、大学に入学したばかりの男の子ガイの部屋にずぶ濡れの姿でいきなり入り込み、ちょっと話をしたところで、いきなりベッドインという行動は一見無茶苦茶だ。しかし、ギルダにはギルダの計算とレッキとした人間観察眼があった。そしてこの最初の出会いが、その後の2人をずっと結びつけていくことに……。

ギルダのさまざまな姿

ギルダには実にさまざまな姿がある。その第1は、女優、カメラマン、アーティストなどあらゆる方面に示す豊かな才能と、その才能を活かしていく天性のパトロン獲得能力(?)。これがギルダの魅力のひとつでもあることはたしかだが、ふられたり、ポイ捨て状態となったパトロンはたまったものではない。ギルダをめぐる男同士の葛藤がいつも展開されるのは当然のこと……?

第2は、上流階級の娘として育てられ、そのメリットは享受しながらも、その父親を嫌い、その遺伝子を引き継いでいること自体を嫌悪している、いわばファザコン気味の女性だということ。

そして第3は、私には本来的に彼女は情熱家で、愛する男を一途に想うタイプだと思われること。

そんなこんなのさまざまな性格が入り混じっているため、単純な私などはもちろん、イングランド紳士のガイでさえも、翻弄され気味になるのは当然。いくら魅力的でも、こんな複雑な女と付き合うのは大変だと痛感……。

奇妙な3人の共同生活には興味津々?

映画前半のハイライトのひとつは、気まぐれのようなアラビアへの長期旅行

(?) からパリに戻ってきたギルダがガイと再会し、1936年のパリを舞台に、ギルダとガイそしてその中にミアを加えた1男2女がくり広げる奇妙な共同生活。仕事も名誉も備わり、お金も自由もすべてそろった享乐的で、ある意味では頹廢的な3人の共同生活。そこには当然ギルダとガイとの自由なセックス関係もあったが、ギルダはそれのみならず他の男性とも……？ またギルダとミアとの間の女同士の微妙で妖しい関係は……？

そんな共同生活の中、一度はガイからギルダに対して「結婚しよう」と言い出したものの、ギルダは「結婚はしない。子供はいらない」という明快な答え。ガイの男性としてのオーソドックスな価値観ではギルダの複雑な女心にもとづく価値観は到底計ることのできないものだった。こんな現実のものとは思えない奇妙な3人の共同生活の様子は、そりゃ興味津々……？

なぜか観客はガラガラ……

私はこのいかにもロマンティックで感動的な物語をチラシや新聞で読み、何としても観ようと思って行ったのが11月1日の晩。つまり映画サービスデーとして大人1000円で入場できる月1日だけのラッキーな日だ。こんな日だから普段より観客は多いだろうと思っていたら、広いOS劇場の観客は何と10~20名程度。しかもそのほとんどがひとりだけで来ている客で、若いアベックは2、3組だけ。一体これはどうしたことだ！

前述したように、第二次世界大戦の時代のパリという舞台設定が難しいいうえにトリコロールというタイトル自体が多くの日本の若者に浸透していないせいだろうと思うが、これではあのアカデミー賞女優のシャーリーズ・セロンがかわいそう……。

2004(平成16)年11月2日記